

るために

十勝石と呼ばれ、町内の畑などから見つかる黒曜石のかけら。そのかけらは、はるかむかし、今から1万5千年ほど前の最終氷河期末期の旧石器時代から縄文時代の人達が作った石器です。今回は、私たちの住むまちにある文化的財産を紹介します。

けていただくと、貴重な遺跡自体を保存することができます。

また、町の事業で得られた遺跡に関する情報が共有できればよいと思います。黒曜石は、どこでも採れるわけではありませんので、貴重な機会をもっている林野関係などの方々からの情報をまとめていけたらよいと思います。生の情報をきちんと把握し、資源の価値を引き出すことが、最低限の基礎、基盤になりますので、そこを早急に進めたいと考えています。しかし、それだけを進めても、何の遺跡なのか、どのような価値があるかわからないので、発掘調査を並行して進めていき、この遺跡の詳しい内容やどういう意味があるのかを合わせて訴えていきたいです」

■文化は伝えること■

「町の事業と文化財の保護を同時に考えていくことや文化財の重要性を伝えていくことは、専門の職員がいなくなかなかむずかしいことです。博物館は作る事が目的ではなく、後世に伝えていくことが重要。早急にそのような体制が構築されていくといいのではないのでしょうか。ありふれたものと思われるものに価値を見出し、それらがどのような歴史的意義をもつかを具体的に明らかにするために、今後も地道に調査していきたい」

かつては畑からも出土していましたが、畑を耕す際には邪魔なものとして、各地へ流出してしまった黒曜石。

「置戸の貴重な財産が流出してしまうのは、もったいないこと。『きれいな石』で終わっては、文化財としての価値はない。壊れてしまうのはあつという間です。価値をきちんと後世に伝えていかないといけない」と、大塚さんは遺跡保存と発掘調査の重要性を訴えました。

最後に大塚さんは「今回も勝山公民館を利用させていただき、とても助かっています。町内の方からも夕食の差し入れをいただきました。僕たちができることは、調査を続け、置戸の遺跡の価値を少しでも伝えていくことです」と話し、感謝と決意を語ってくれました。

3、おけとの歴史についてもっと知りたい！ ～古きを訪ねて新しきを知る～

●資料を見る～郷土資料館

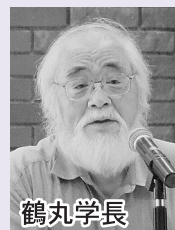
旧石器時代のものから、ごく最近まで使用されてきた生活用具や産業機具などが展示されており、収蔵数及び展示数は約1万点にも及んでいます。詳しくは、中央公民館までお問い合わせください。

●資料を読む～郷土史研究会の発行物や町史など

郷土史研究会は、昭和45年に発足し、資料の調査収集、史跡の保存、資料展示や学習会、置戸叢書などの出版を行ってきました。各出版物の閲覧は、図書館までお問い合わせください。

「小さな博物館の たくさんあるまちづくり」構想

8月20日、中央公民館で札幌学院大学長の鶴丸俊明氏、元美幌博物館長の小林敬氏、元釧路市立博物館長の西幸隆氏を招き、ワークショップが開かれ、40名が参加しました。



鶴丸学長

鶴丸氏から「石器などの文化財の町外流出を防ぐため、専門職の配置と博物館に収蔵・展示をしながら学校との連携教育を行い、文化を伝えていくことが必要。また、郷土資料館や森林工芸館、個人の収集品など文化財が豊富である置戸を、1日でまわることのできる小さな博物館のあるまちにできないか」と提案しました。小林氏から美幌博物館の実例を踏まえた話があり、西氏を司会に参加者との意見交換が行われました。最後に鶴丸氏は、「生涯教育のひとつの鍵である博物館を、夢を語りながら実現に向けて進んでいきたい」と語りました。参加者は、どのように置戸の文化を伝えていくのか、今後の取り組みを考える機会となりました。